

斑点米カメムシ類の発生動向に注意しましょう！

斑点米カメムシ類は、水稻の籾を吸汁し斑点米を発生させる重要な害虫です。水田内へは周辺の畦畔や牧草地のイネ科植物から飛来するため、これらを対象に6月下旬に発生状況を調査しました。その結果、アカスジカスミカメ及びアカヒゲホソミドリカスミカメなどの小型のカメムシが主で、斑点米カメムシ類全体の捕獲数は平年並でした（平年比 119%）（図1）。

季節予報によれば、向こう1か月の平均気温は高いと予想されており、気温の上昇とともに斑点米カメムシ類の水田への飛来や、今後の発生量が増加する可能性があります。

水稻の出穂予想は前年より4日程度早い見込みです。水稻の出穂期以降は水田を観察し、本害虫（写真1）の侵入が認められる場合は、薬剤防除を行いましょ。出穂期前後のみの除草は、斑点米カメムシ類の水田への侵入を助長するので、原則行わないようにしましょう（図2）。やむをえず除草を行う場合は、水田の薬剤防除直前に行うようにしましょう。

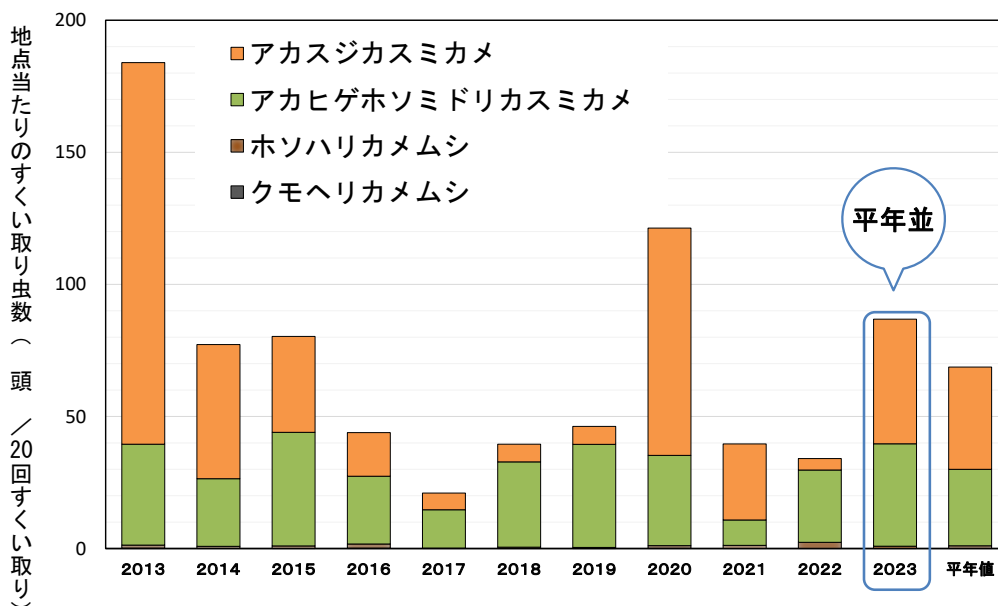


図1 斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果

※本年は、令和5（2023）年6月下旬に、41地点で実施。

※平年値は、平成25（2013）～令和4（2022）年の10年間の平均値（調査時期6月中旬～7月上旬）。

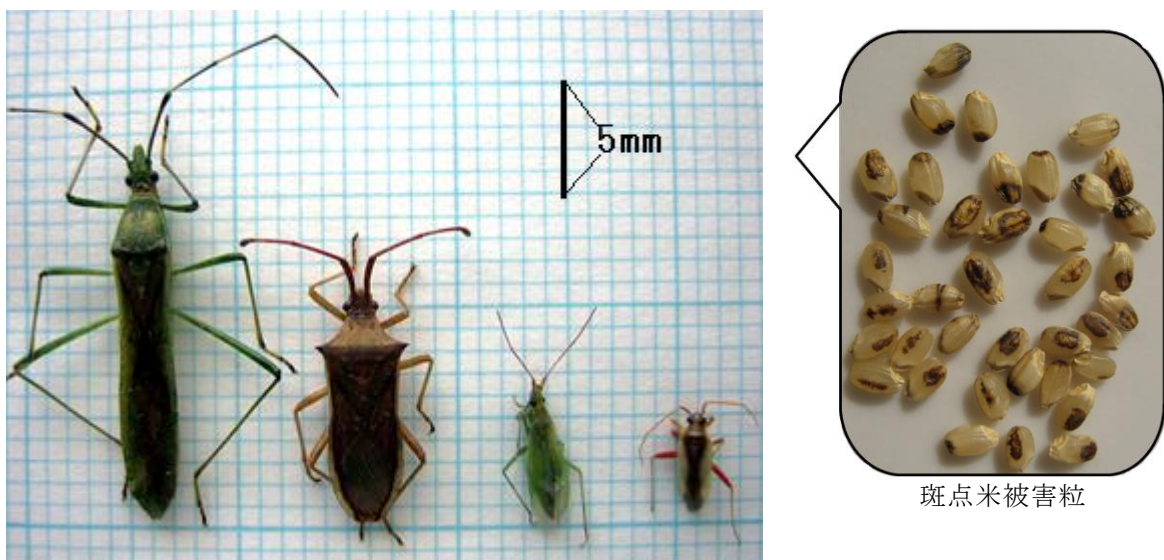


写真1 栃木県の主要発生種及びカメムシ類の吸汁害によって生じる斑点米

（左からクモヘリカメムシ・ホソハリカメムシ・アカヒゲホソミドリカスミカメ・アカスジカスミカメ）

《防除対策》

○化学的防除～薬剤散布は適期に行う～

- ・ 出穂期から穂ぞろい期頃に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、液剤は出穂期7～10日後まで、粒剤は出穂期～出穂期7日後までに散布する。
- ・ その後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、液剤を7～10日間隔で1～2回追加散布する。
- ・ 斑点米カメムシ類の薬剤防除がミツバチに被害を及ぼすことがあるので、養蜂家へ農薬散布日を周知する等の積極的な対応を行う。

表1 水稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤（令和5（2023）年7月5日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
ダントツ粒剤	3～4 kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	クロチアニジン	ネオニコチノイド	4A
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン		
エクシードフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	スルホキサフロル	スルホキシイミン	4C
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンブロックス	ピレスロイド	3A
キラップフロアブル	1000～2000倍	収穫14日前まで	2回以内	エチプロール	フェニルピラゾール	2B

注：RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

○耕種的防除～除草によりイネ科雑草の結実を抑える～

- ・ 水田内に残ってしまったヒエやホタルイなどの雑草も斑点米カメムシ類の誘引源となるため結実前に除草を行う。
- ・ 水田畦畔や農道等の雑草は斑点米カメムシ類の誘引源となるので、地域ぐるみで除草を行う。
- ・ 水田周辺のイネ科雑草の結実を長期間抑え、カメムシ類の水田への侵入を防ぐため、水稲の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回除草を行うと効果が高いが、両時期の除草ができない場合は、水稲の出穂期10日前までに済ませる（図2）。
- ・ 出穂期前後のみの除草は、カメムシ類を水田へ追い込み、水稲の穂を集中加害させることになるため、原則行わない。

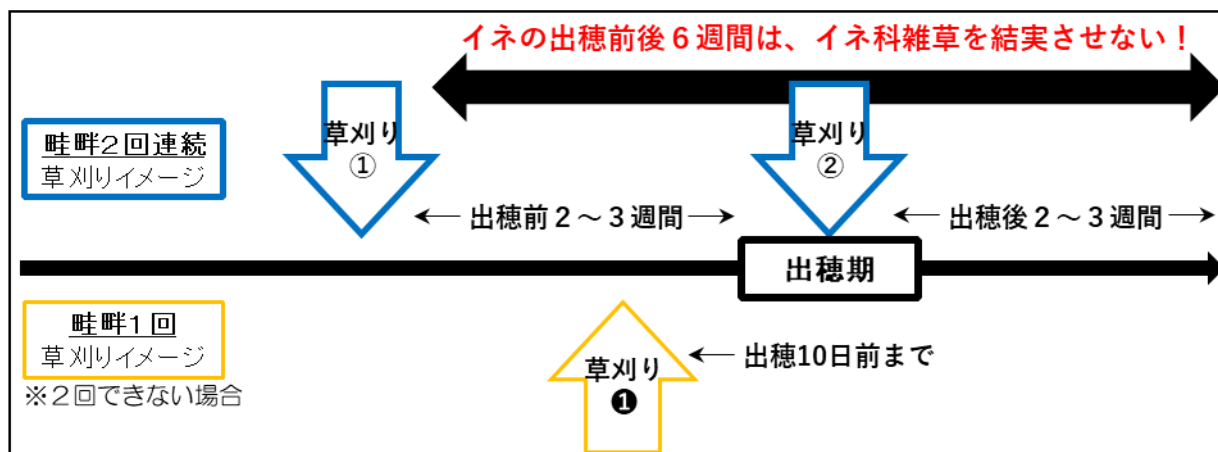


図2 雑草管理のイメージ

病害虫防除対策のポイントNo.16「斑点米カメムシ類の防除対策」参照

（農業環境指導センターホームページトッパー防除課－技術情報）<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/gijutu/point/No16.pdf>

詳細は、農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター（@tochigi_nousei）」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。
いつものチェック！ 農薬を使用する際は、ラベルをよく読み正しく使しましょう！

